教育長だより No. 28

２０２４年２月７日

まず、先生のなかまづくり

～ 子どもに見せよう教職員のチーム ～

１．先生のなかまづくりは、子どもたちのモデル

どの学校や園でも、子どもたちのなかまづくりを大きな目標にしています。子どもたちに社会性を身につけて送り出すことが求められているからです。また、少子化や家庭の孤立化のなかで子どもが社会性を見につけることが難しくなっている昨今、学校や園にその役割を大きく期待されています。そして、そこではさまざまななかまづくりが実践されています。

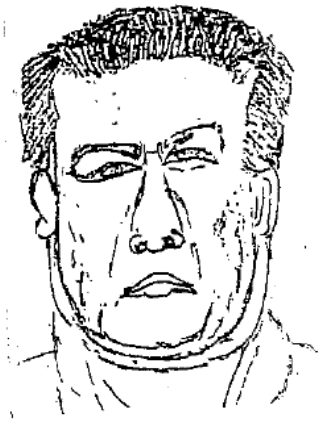
その一方で、先生たちのなかまづくりはどうでしょう？「忙しくて、とてもそれどころじゃない。」というお叱りの言葉が出てくるかもわかりません。でも、『大人は子どもの鏡（かがみ）』という言葉もあるように、子どもたちは先生たちのなかまづくりをちゃんと見ています。子どもたちのモデルとなるためにも、大切なことではないでしょうか。

また、そもそも学校や園という組織自体の特性もあります。ごく少数の管理職と、多くの先生が大学を出てすぐにこうした職場に入ったため、企業や行政の「タテ社会」を知らずにいます。学校や園の管理職は「ナベブタ」と言われるように、校長（園長）などごくわずかで、それ以外の職員はみんな平等です。社長、専務、部長、課長、参事、課長補佐、係長・・・など、さまざまな「タテ」の役職がある組織とは大きく異なっています。教育（保育）の現場では、上司の指示・命令などとは、日常的にはほとんど無縁といってもいいくらいでしょうか。大学の体育会系のクラブを経験した人以外は、組織の上下関係と言われてもピンとこないのでは？ そして、赴任してからは「先生」「先生」と言われて、新任もベテランも同じ立場。これが教育（保育）のいいところでもあるのですが・・・。いわゆる上下関係など、意識の外だとも言えます。

２・なかまづくりと『同僚性』

同僚性を簡単に言うと、先生方が互いに支えあい・高めあっていく協働的な関係のことです。今日の教育や保育に求められる課題が山積するなか、教職員の世代交代が大きく進み、私たちの教育・保育の資質が問われています。そして、それに対応すべく教育委員会などがさまざまな研修を打ち、教職員の資質向上をめざしています。ところが、そうした研修などが教職員の「多忙感」やストレスを生んでいるとも言われます。そこで、こうしたマイナスの克服と資質向上を同時に目指すものとして、この『同僚性』が注目されています。文科省が「チーム学校」という背景には、このことが大きくあります。同じ教員どうしが支えあって力を高めていくこと。まさになかまづくりです。

３．私の同僚性？



今からちょうど４０年前、私は教育とは畑違いのところから教師になりました。大学の法学部出身です。教師として育ててもらったのは、松原三中（大阪府松原市）という「現場」でした。学年１０クラスの大規模校。しかも、加配教員が多く、教員は７０名あまり。（当時の大阪府は国の加配が１００人あまり、それ以外に大阪府で独自加配を１，０００人ほど配置していました。）同じ学年の先生だけで二十数名もいたので、他学年の先生の名前はなかなか覚えられませんでした。そんな「松三」は、滋賀で言う教育重点校。私が赴任する７～８年前までは、大阪では超有名な「荒れた」中学校でした。そこで、１９７１年から学校の教育改革が始まります。イラスト（右上）の北山先生が４０歳そこそこで校長として、もう一人、矢野先生と共に校区の布忍（ぬのせ）小学校からやって来ます。北山校長は地元松原の「武闘派」、矢野先生は彦根出身の「理論派」。実はこの二人は小学校では教育方針をめぐって「犬猿の仲」でした。しかし、北山校長の「今、中学校が火事や。けんかしてる場合やない。火事がおさまってからゆっくりけんかしょうやないか。」という言葉で合意。この二人が手を組んで、同和教育を柱に学校づくりが始まったのです。しかし、荒れていた生徒も多く、この中学校への転勤を希望する先生はおらず、毎年ベテランが転出し、代わって「まっさらの」新人が入ってくるという状況でした。私が赴任したときも、初任者が１１名でした。（新任が７名と臨時講師が４名）私は１年の担任です。２階の職員室（教室３つ分の部屋）の１年の「島」（同学年の教師の机が集まっている所）で、私ともう一人の初任者が並び、その向かいに退職間近のＡ先生。その横にも初任者がいました。複数担任制でしたので、それぞれベテラン（と言っても３～５年先輩）の先生とペアで担任をしていました。私は若い先生方があまりにも多かったので、「大学とあんまり変わらんな。」と思ったものです。確か、当時の教員の平均年齢は２７～８歳だったと思います。

「松三」は、こうした若い先生を一人前の教員に育て上げないと、学校として成り立ちませんでした。そこで、Ａ先生のようなベテランが新任の「教育係」となっていたようです。私たち１年所属の新任の男３人は、この先生にそれこそチョークの持ち方から教えてもらいました。また、ゴム印（大・中・小の氏名印）や５種類のファイルまで、「これを買いなさい。」と指示されていました。私が「こんな大きな氏名印は何に使うんですか？」と聞いたら、「３年の内申書用です。」との答え。「ぼくらまだ１年ですけど・・・。」（注：中学校は、基本は持ち上がりです。）と私が言うと、「つべこべ言わんと買（こ）うとき！ いずれ要るんやから。」との返事でした。私たちデコボココンビの３名は、こうして先輩に育てられたものです。Ａ先生は退職前のベテラン女性でしたが、同じように他学年の新任にも少し先輩の「教育係」の先生がいたようです。

また、『学級びらき』のメイン＝担任の「第一声（だいいっせい）」には、相当な力を入れている学校でした。４月の始業式の後がその時間です。１時間かけて２人の担任が「こんなクラスにしたい！」と交代で語ります。自身の生い立ちや教師をしていてうれしかったこと、つらかったこと、その中でのなかまとの出会いや支えの大切さなど、どの先生も熱く自分を語ります。

もちろん、この第一声も先輩たちにいっぱい教えてもらいました。自分の人生を振り返って２０分ぐらいで生徒に語るんですから・・・。大学出たての私たちにとって全くの「別世界」のこと。学年の先輩たちが何人も具体的に話してくれ、だいたいのイメージができました。こうして、４月の教員生活が始まったのです。今から思えば、「大事に大事に育ててもらった。」と思います。